
転ばぬ先の、杖。

街乃アカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転ばぬ先の、杖。

【Nコード】

N1839A

【作者名】

街乃アカリ

【あらすじ】

イマドキの若者として悠々生きてきた森中拓也は、ある日、突如として人生の悩みの前に立たされてしまう。困惑した拓也のたった行動とは…。

はじめりは、中華料理。

ぺしぺしぺし。

拓也は一心不乱に固形石鹼を泡立てていた。

とはいえ、中央に牛の刻印がなされている石鹼は、ところどころひびわれ、ひびわれているものだから泡立たず、要するに拓也はあらぬ方向を見ながら、ものすごい勢いで両手を擦り合わせる運動をしていたにすぎなかったのだ。朝の洗面所で。

しかしこういうことをしているからと云って、彼が只の阿呆だというわけではない。

そら外見こそ金髪でピアスでちゃらんぼらん、環境問題になんて百年経っても思い及ばなそうな森中拓也二十二歳ではあるが、必要最低限のIQおよび世間常識くらいは身に備えているのだ。

やたら馬と鹿をくつつけて連呼してはならない。

ともあれ拓也は石鹼を両手の間でひとしきりくるくるしたあと、あらぬ方向を見ながらそれを顔に塗ったくって、水でざぶざぶした。

洗顔である。所要時間三十分。

そしてやっと洗面所から出ると、時計を見やって嘆息した。

六畳一間のフローリングは、パンの包装袋、紙屑、割り箸、弁当の空き容器、ひっくり返した灰皿とたばこの吸い殻、ペットボトルなどで、まるでこの世の果ての如き、戦のあとの夢の如き、散らかり様である。

それを放置して、拓也はシャツ状の、くたくたの上着を黄色いシャツの上に羽織った。

さて、森中拓也はなぜ洗顔に三十分もかけたのか、というか、なぜこのように落ち込んでいるのか。

話は二日前にさかのぼる。

二日前、拓也は繁華街にいた。

場末のような様相を醸し出す中華料理店で、ビールを呑んで、いた。

「ちよー、ファンちゃん、ビール足んねーよー。もってきてよー。ついでにキツスしてよー、俺にー。」

等と言いながらその店の看板ウエイトレス、雲南省出身のファンちゃんに絡んでいたのである。

「しずかにする、あんた」

ファンちゃんは眉根に皺を寄せながら、迷惑と言えども客だしな、給料入るまでがまんがまんね、といった態度で、渋々拓也にビールを運んだり、尻をさわられたりしていた。

「おーい、おやつさん、マーボー豆腐とかちよーだいよー、みたいなの。」

完全に迷惑なダメ客である。

おやつさんはニコニコしながら、その裏にそれ以上騒いだら殺すぞ的な殺意をこめて言った。

「たくちちゃん、呑みすぎじゃなあい？」

「おっ？そうかなー？まだまだいけるんですけどー、みたいなの。」

拓也がこのようにくぐてんくぐてんになるのは何も特別なことではない。彼は大学生、しかもこの中華料理店のある界限で、日払いのアルバイトをしていた。

そして、アルバイト先である建築現場から引き上げると、家に帰る前にこの店で飲食をするというのが彼の日課だったのである。

マーボー豆腐が運ばれてくると、拓也はまたファンちゃんにビール、ビール、っつーか結婚してファンちゃん、等と言いつけ、箸をもつてこれを食い始めた。

と、不意に携帯電話が鳴った。

拓也は、なんだよー、うつせえな、げっ！！実家からじゃあんと呻き、おもむろに電話機を耳にあてた。

と、同時に、ビールを持ってきたファンちゃんの横を走りぬけ、表に飛び出した。真顔で。

そりゃねえぜ、パパ。

びっ。がちやつ。

「もしもし、あ、ママ？」

驚くなかれ、拓也の実家は地元ではかなり有名な、代々続く、老舗の酒店であり、故に拓也はボンボン、しかも一人息子、すなわち母親はママと呼ぶようにというしつけを、幼い頃からされていたのである。

「そうよ、拓也ちゃん。もう、あなたちつとも連絡くれないんだもの。ママ心配しちゃったわ。」

ママはまるで愛人にも甘えるが如き声音でべったりと囁いてくる。何度電話してもこれだけは慣れない。

拓也は、気持ち電話機を耳から離し、なるべく誠実そうな口調で答えた。

「う、うん、連絡しなくてごめんねママ。僕は元気だよ。」

まさか、ヘイママ、僕は今まで酒をかつくらい、ちよっと可愛いウエイトレスにちよっかい出してたんだぜ。

ヘイ。クール？男の鑑だろ？なんて言えない。

「そ？なら良かったわ。そうそう、パパが、拓也ちゃんにお話があるんですって。今かわっていたたくわね。」

相変わらず受話口に口紅がべったり付くんじゃねえかというくらい、受話器に近い囁きをしたあとで、がちやつ。

びんこぴんこぴんこぴんこぴーん、ぴんぼー。

向こうで保留音が流れ出した。

そこで、勘弁してくれよお。

すかさず嘆息した拓也の、嘆息の先っぽが口から出きらないうちに、びんこぴんこぴ、がちやつ。

「拓也か。パパだが。」

威厳たつぷりのくせにパパ。な声が受話器から流れ出した。

大体において、拓也はパパが苦手なのである。

楽しい会話をしていても、不意にそれを遮り、拓也、勉強はしているのか、或いは、こないだ、数学が五十点だったらしいな、と、わざとか何か知らないが、楽しくない方向へ捻じ曲げてしまう。その恐るべきベクトル。

場は白け、沈黙が流れ、拓也はろくすっぽ勉強なんぞしない子供であつたから後ろめたさでやりきれず、はい、とつても気詰まりな一家団欒、一丁あがり。という感じだったからである。

しかもパパは、生来頭が良いパパだったので、勉強はやらずとも出来る、よしんば出来ずとも、やれば必ず出来る。という持論の持ち主なのである。

そのため拓也は、パパと対峙すると、
パパさん、僕は勉強が出来ないよ。

しかしね、頭が良い親の息子もまた、必ず頭が良いなんて神話じみた遺伝は、ありえないんだぜ。

あるときもあるが、ないときもあるんだぜ。OK? 故に愚息ですよ。僕は。

という卑屈な考えが鎌首をもたげてくるので、パパと楽しくふれあい、なんていう記憶はあまりないのである。

そんなこんなで拓也とパパの会話はどうにも噛み合わないのだ。

「で、拓也、いつ帰ってくるんだお前。」

「ええつとね、らい、来月の末? っていうか約束は出来ないんだよね、っていうか、いまレポートたまっててさっていうか。」

「いや、まあいい。それは。その話じゃないんだ。」

「えっえっ? そうなの? ああそうなんだ。じゃじゃあ何? 話ってなあに? みたいな。」

沈黙。

秀才なる親父殿、すなわちパパは、愚にもつかない御息、すなわち拓也の口調に失望したのか短く息をつき、話を切り出した。

「拓也、お前どうなんだ?」

「どつどつってなに？何が？」

「いや、つまり、決めてるか決めてないかだよ。」

パパはパパらしくなく具体性も精彩も欠いた口調でイラついたように言い放つ。

沈黙。

「・・・話が、見えないんだけど？」

絞り出したかのような拓也の言葉に、ようやくパパは本題をはつきりと、明確に発音した。

「お前、ウチを継ぐ気は、あるのか？と、聞いているんだ。」
がーん。

目の前が真っ暗になったかのような感を抱いて、まあそれは夜だし外だから当然なのだが、拓也は酔いも醒めたというのにアスファルトにしゃがみこんでしまった。

あのデカ古い店を？俺が？俺が？どうにかやり繰りしろって？無理だよ。

潰しちまうよ。っつーかめんどくせえよ。っつーかこえーよ。あの店の、歴史が。

拓也はよろよろと立ち上がり、ようやく問うた。

「・・・本気で？」

「ああ。本気だ。パパはいつだって本気だぞ。」

「でも、僕・・・何も知らないし・・・」

「情けない声を出すな。知らないんだったら教えてやる。なんたってお前はひとり息子だからな。」

沈黙。

「継ぐなら一カ月後に帰ってこい。学校なんか辞めて。実はなあ、ママが、病気なんで人手が足りないんだ。」

拓也は仰天した。

ママが病気？じゃさつき電話にでたのは幽霊？っつーか入院してねーだけ？

「びっびぶよっき！？なんの？？」

「なんでも糖尿病とかなんとか。まあ入院して、食餌療法をとるんだろうな。長期になりそうだからな。」
天地がひっくり返っちまいそうだ。

この楽しい生活をやめて、実家に帰って？

パパは、継ぐんならとか言ったけど、帰らなきゃ激怒の拳句勘当、俺は文無しってことになるのは必至だ。

拓也はぐるぐる考えていた。

いつ電話が切れたのかもわからなかった。

っーっーっー。

とぼとぼと店に戻った拓也は、それまでの覇気が嘘のようにしょんぼりとして、ボソボソと金を払って、すたっ、すたっ・・・と、幽霊のような足取りで家に帰ったのだった。

ナイスアイディア、山本。

と、いうわけで、かかる経緯の結果、それまで悩み等抱えていなかった拓也は、一日にして家業を継ぐか、否か、という、究極の選択肢の前に立たされてしまったのである。

ちなみに、拓也は家業を継ぐ気などさらさら無い。

無いのだが、あのパパのこと、帰らぬという結論を出せば、勘当という穏やかな手段では無しに、荒縄と馬で以って、市中引き廻しの末に、屈強な男を数人連れてきて、意識を失うまで張り手、更にガムテープでぐるぐる巻きにして、車のトランクに蹴り込み、無理やり実家に連れて帰り、オプシオンとして丁稚のようにこき使う、というような仕打ちをするかも知れぬ。

なぜならば、威厳たつぷりのパパは、子供が言うことを聞かなければ体罰してなんぼ、という論理の持ち主でもあるからである。痛い目に遭わずに家業を放棄するにはどうするか。

あの電話の一件以来、拓也はかように考え悩みながら、金髪をゆらゆら揺らしながら、洗顔に三十分もかけたり、散らかった部屋も片付けずにそのまま、洗濯も滅多にせず、等という奇行に及ぶようになったので、ある。

さて、話を今現在に戻そう。

シャツ状の上着をひらりと羽織った拓也は何処へ行くのか。

答えは簡単、学校に行くのである。

しかし本日は土曜日、ぐうたらな拓也は土曜日には授業を入れていない。

しかし、曜日の概念など気にしないといった風情で、拓也はシューズを履き、ドアの鍵を閉めると、学校へと歩みだした。熱いアスファルトを踏んで。

三十分後。

彼は大学の構内のベンチに座ってタバコをふかしていた。

人待ち顔である。

更に十分。

彼の前に一人の男がやって、きた。

「うーす先輩。」

そう言った男は、金髪ピアスの拓也とは対照的に、黒髪銀の腕時計の、真面目そうな風貌である。

彼は山本健一。

拓也と同じ大学で、先輩と呼び掛けた通り、拓也の一つ下である。

拓也が土曜なのにわざわざ大学まで出向き、ベンチで待っていたのは、彼に例の悩みを話してみようと思っただからであった。

後輩に悩み相談、とはこれ如何に。

それにも理由があつて、山本の実家は山本旅館という、山梨の老舗旅館であり、更に山本は旅館の一人息子、御曹司。拓也と似た境遇の男なのである。

「なんすかー、話つて？」

そう言いながら、白い歯を見せる山本。

「おまえさー、実家、旅館だったよな？」

拓也はタバコを通路に落とす足で踏み消しながら問うた。

「そうすよ。あつ先輩ダメじゃないすかー、タバコのポイ捨てとか。そんなだから喫煙者のマナーがどうか言われて、JTもCM作っちゃうんじゃないすかー。」

「うるせーな、JTは俺と関係ねえじゃねえかよ。」

「いやあ、どうすかねー？JT、見るかもしないすよ？」

「見てねーよ！JTの話しに来たわけじゃねんだよ俺は。」

「え？じゃあ何すか？」

拓也は嘆息した。山本は、ちよつとズレているのだ。

「おまえ、実家旅館だろ？」

仕方なしにもう一度振り出しから始める拓也。

「あ、はい。何すか？旅館旅館つて。あつ、先輩もしや、彼女か何かとウチの旅館に泊りたいんすか？」

また違う方向に話をもつていこうとする山本。

「ちげーっつんだよ。俺、彼女いねえよ。しかも何だよ、彼女が何かってよお。仮に俺に彼女がいたとして、彼女の他に何がいるんだよ。母親か？ペットか？

いや、そんな話じゃねんだよ、聞きたいんだけどよ、おまえ、実家継ぐ？」

長々と山本の言葉を糾しながら核心的な質問に及んだため、どうでもいような質問になってしまった。

ちっ。拓也は舌打ち。

しかし山本は、意外に真面目に回答した。

「いや、継がないス。」

「なんでよ？」

「親に継げって言われたら考えますけど、継がないと思いますよ。

俺より経営に詳しい使用人とか雇って、ゆくゆくはそいつに経営させりゃいい話じゃないスか。」

「じゃ母親が病気だよ、しかも急に倒れて、今、人手が欲しいから、何でもいから継げよこの野郎って父親に言われたら、おまえ、どうすんの？」

質問と見せ掛けて、自分の悩みを相談し、そのうえ何かしらの答えを与えてもらおうとする姑息な手段である。

「あー。それキツいつすねー。」

言うなり考えこむ山本。親身である。

拓也が新たなタバコに火をつけ、それをもみ消した頃になってようやく山本は顔を上げた。

「自分だったらず、バイト探しますね。」

「はあ？である。」

家業を継ぐか否かの状況で、何故まずバイトなのか？

「はあ？なんでよ？」

拓也が聞き返すと、山本はいつもの、変に情熱的な様子で解説を加えた。

「だって先輩、考えてもみてくださいよ。何で親が、自分に継げ継げ言うのかって言ったら、自分が学校以外に何もやってない、って思うからじゃないスカー。ちゃんとしたバイト見つけて、俺、一生やっていきたい仕事、見つけたから帰れねえ。とか言えば親だってそんな直ぐには継がせようと思わないと思うんス、俺は。」

そのきつぱりした口調と、きらきらした目に気圧されて、拓也は納得してしまった。

「なっ、なるほどな。」

「ハイ」

「でもおまえソレ、一時凌ぎじゃねえ？」

「そりゃそうスけど、やらないよりはマシじゃないスカ。」

「そうだよな……」

「そーッスよ！」

そのまま二人は黙った。

前を歩いてゆく人々の靴が、色とりどりに、靴、靴、靴、靴、であった。何足の靴を数えた頃だろう。山本が不意に腕時計を見、

「あ、先輩、俺そろそろ行っていいすか？彼女待たしてるんで。」

山本は見かけ倒したが、その見かけで結構モテるのだ。

「おう。悪いな、待たしてんのに長々と話しちゃって。」

「いーッスよ。じゃ、先輩また来週！」

そう言つて山本はさわやかに去つていった。

拓也は山本を見送つてのち、何本かタバコを煙に変えると、立ち上がった。

そうだ、バイトだよ。日雇いなんか辞めて、長期間できるバイト探そう。

そう思うや否や、頭に豆電球がぱっとひらめいたような気がして、拓也は歩きだした。

吸い殻を残して。

夕暮れの街へ。

なんなんだ、染谷。

夕暮れの街には光が沢山溢れている。

どれも安っぽい光だ。

太陽の光とは似ても似つかぬ、偽物の光だ。

拓也は歩き回りながら舌打ちを繰り返していた。

ちっ、ちっ、ちっちっちっちっ。

ドラムのスティックを打ち鳴らすかのようなリズムカルな舌打ちである。

舌打ちだけでは飽き足らず、彼の顔には般若じみた怒りの表情が浮かんでいた。

バイトが見つからないのだ。

バイトを探そうと思っただけで街に出た拓也はまず、タウンなんかという名前の、求人雑誌、しかもフリーペーパー、を取って、そこから「一生やりたい仕事」に匹敵する仕事を探そうとした。

しかし、飲食業や接客業は「髪染不可、経験者歓迎」や「髪染不可、未経験者歓迎」であるため、どうもやる気が起きず、かといって他の仕事は「テレフォンオペレーター」「倉庫内でのフォークリフト作業」「新聞配達」「魚市場でのセリ手伝い」「Tシャツの販売製造」「キャバクラ嬢の送り迎え」などなど、いつ辞めてもいいような、そして拓也には到底続かなそうな仕事ばかりであったのだ。

その中からどうにか苦労して「スーパー内での生鮮売り場担当」という仕事を探し出し、いい加減な気持ちで電話をしたら「ああ、昨日埋まっちゃったんですよねー。すいませーん。」などという戯けた答えが返ってくる始末。

ちなみに何故拓也が金髪を黒髪に戻したくないかというと、黒髪にすると、パパにそっくりな顔をしているからである。鏡を見るたびに「あつ、あつ、パ、パパ？（ゾゾー）」という鳥肌体験をするのはゴメンだからである。

そういう訳で、拓也はスティックの舌打ちと般若の形相をやめずに、よもや店先に求人広告が貼り付けてあるんじゃないかという期待を抱きながらぐるぐるぐるぐる街中を徘徊しているのである。

「はー。」

嘆息した拓也が足を止めたのは、日もとっぷり暮れた午後八時、帰宅時のサラリーマンが駅から出て、コンビニでビールを買うような時間帯であった。

ちっ。。。

最後の舌打ちを弱々しげに鳴らすと、拓也は方向転換をした。

というのも、大分街中から離れて、自宅とは反対方向にある住宅街に足を踏み入れていたからである。

はー。はー。

今度は嘆息の連続である。

その嘆息は漫画なんかでよく見る吹き出しの形をとって、夜空に浮かびそうな、質量と具体的な絶望を伴った嘆息であった。

「なんでだよ。。。」

このなんでだよ、は勿論、なんで自分の働く場所が無いんだよ、の略である。

四の五の言わずに黒髪に染めて、喫茶店でもウエイターをやれば良さそうなものなのに、若さゆえか、この頃には彼はもう、絶対金髪のままていく、との決意を固めてしまっていた。

普通逆なような気もしないでもないが。

帰途についた拓也は、それでも諦めずに、先ほど見落とした店が無いかそしてその店は求人広告を貼り付けてはいないか、路地の隅の隅まで見透かしそうなギョロ目で、周囲を見回しながら歩いていた。と、そのとき。

見落としそうなほど小さな店のガラスに、

「当方、アルバイト急募集。長期可、髪染可。仕事内容、簡単な事務。男性歓迎」

と書かれた広告を発見した。

「あつ。」

拓也は声を上げて、その貼紙がなされている店の扉に駆け寄った。

「髪染可」

「男性歓迎」

読めば読むほどこの二語が二倍の大きさとなって拓也の目に飛び込んできくる。

どうすつかなー、と考える暇もなく、拓也はその店の扉を押し、中に入った。

きいっ、からころから、ばちゃん。

扉の上に吊り下げられたカウベルが鳴る。

その店は、外見は和菓子店のような木造、平屋で、扉はドア状であるものの、ガラス部分が多く、昼間であれば中の様子が道行く人に見えるような形で建築されている。

ドアには「染谷サービス」と書かれているが、具体的に何のサービスをするのか、というようなことは、ガラス部分にも木製部分にも書かれていない。

中は、薄暗く、本当に和菓子でも並んでいそうな陳列ケースの上に書類の束が幾重にも積み重なり、その奥、即ち調理場様の小部屋に通じる通路と、その奥がほんのりと明るい。

おそらく元々は、本当に和菓子店であったのであろう。しかし、今は違うらしい。

更に入つてすぐの場所には、テーブルと椅子が設えられていて、テーブルの上には、夥しい数のボールペン、サインペン、鉛筆、カラーペン、油性ペン、鉛筆、消しゴムと紙が無造作にばらばらと置いてある。

拓也はその異様な光景に息を呑むと、誰も出てこないことに気づいて声をあげた。

「あの、すいませーん。」

かしかしかし、かりかりかり、しゃかしゃか、きゅきゅ。

口を噤んだ瞬間に、拓也は、灯りが点っている奥の部屋から、微か

に紙をすり合わせるような音が聞こえてくることに気づいた。

しかも、ひとつひとつは小さな音なのだが、何倍にも重なることで大きな虫が這い回るような音のようにも聞こえる。

拓也はもう一度唾を飲み込み、今度はもう少し大きな声で叫んだ。

「す、い、ま、せーん。」

・・・きゅつ。

音が一斉に止んだ。拓也がギクツ。としていると、

「・・・はいよ。」

という中年男性の声が聞こえ、まもなく頭の禿げ上がった、温厚そうな太った中年男性が出てきた。

「はいはいつと。何か御用でしょうかね？」

慣れた調子で笑顔を浮かべている。

「あの・・・表の、貼紙、見たんすけど・・・」

拓也がその人物の様子を伺いながら切り出すと、

「あーはいはい。バイト希望？」

男は手を打ち合わせて嬉しそうに言った。

「あ、そうす。」

きゅきゅきゅきゅ。かりかりかりかり。しゃかしゃか。かしかし。

あの音がいつの間にかまた始まっている。

男が陳列ケースの後ろから、拓也の前に歩いてきて手を差し出した。

「私、染谷サービスの社長してます、染谷みのると申します。」

「あ、はい、あ、何スか？」

差し出された手に戸惑っていると、染谷社長は強引に拓也の手を握り、上下に振った。

「よろしくね。」

「あ、はあ・・・」

握手なら最初つから言えよ、ハゲ。等と拓也が中傷の言葉を胸のうちでこねくり回していると、染谷社長は、あの夥しい数のペンが置かれているテーブルの前に立って、拓也を招いた。

「ちよつと君、こつちおいで。」

拓也がそちらに移動して、勧められるままに椅子に腰掛けると、染谷社長は笑顔で言った。

「ウチは特に面接とか無くてね、基本的に来てくれた子はみんな採用してるの。うん。それでね、まあ、一応適正を見るために、字を書いて貰ってるんだけど、君、その紙にさ、どのペンでもいいから、自分の名前書いてくれる？」

「あ、ハイ・・・」

字を書くことが適正に繋がるのか？と半信半疑だったが、それ以前に拓也は字が下手くそなのであった。

キレイな字を書く人がこの仕事に適しているとか言われたらどうしよう。

拓也はペンの中からボールペンを引っ張り出すと、染谷社長に問うた。

「あの、字がキレイな方がいいとか言う話っすか？」

染谷社長はそれまでじっと拓也の手元を見つめていたが、その質問を聞くと、笑顔で答えた。

「ううん、そういうわけじゃないの。まあ、キレイ汚いと言えば、汚い字の方が好ましいけどね。」

ますます意味がわからない。

それに染谷社長ったら、拓也がここに来てからずーっと笑顔だ。

顔が筋肉痛にならないんだろうかと思いつながら、拓也はなるべく丁寧に自分の名前を書いた。

「森中拓也」

白い紙にのたくる字。丁寧に書いても汚いものは汚い。

書き終わってから拓也が染谷社長の顔を伺うと、染谷社長は何秒間か拓也の字を見つめたあとで、拓也の肩をぽん、と叩いた。

ヤバイ、不合格か？

と思いきや、染谷社長はとびっきりの笑顔で、七福神なんじゃねえのこの人？っていうくらい笑顔で、言った。

「ハイ、合格。」

「えっ？」

「いいね！君の字。最高だよ。こういう字を書く子を待ってたんだよね。まあ奥に来てくれる

？これからの仕事の説明するから。」

染谷社長は訝しい顔をした拓也の背を押して、陳列ケースの裏、灯りの灯っている小部屋へと、拓也を歩かせていった。

小部屋に近づけば近づくほど、インクの匂いが鼻をつく。

おそらく封筒の宛名書きの代筆とか、そういう仕事だろうな、でも、汚い字で宛名書いても、読めなかったら配達出来ねえんじゃないの？という疑問を胸に抱きながら、拓也は染谷社長が押すままに小部屋に入った。

もう、夜の九時過ぎだった。

ドンマイ、サキタ。

染谷社長は、ぐいぐいっと、拓也の背中を押して、蛍光灯の灯った部屋に押し入れた。

まったく人のことなんかお構い無しである。

アンタ、何で前に立って案内しないのよ？と拓也は思っていたが、その理由は直に判明した。

無事に拓也を部屋まで押し入れた染谷社長は、ぷー。っと息をついた。

まるで 倉庫番である。

そうしてのち、汗だくの染谷社長は、例の七福神スマイルを浮かべ、背後で、

「はいはいっと。いーい？森中くん、ここが仕事場、ね。ちよつと見学してくれるう？私、ちよつと、誓約書と、労働規約持ってますんで。

サキタくん、ちよつと、森中くんに簡単に説明してあげてよ。」と、言い残して、ドタバタドツと、漫画みたいに走っていつてしまった。

そのとき拓也は、ほんと関係ないけど、あいつ本当に布袋様に似てるなあ。と思っていたのである。

その為、返事が遅れてしまった。

「あ、ハ……。」

拓也の返事が終わらないうちに、染谷大黒天、いや社長の姿は、影さえも残さいくらい、あつという間に、消え失せていたのであった。

「……イ。」

そのまま口を開けたまま突っ立っているのも癪であるし、きまざいし、ということ、とにかく最後まで返事を口に出した拓也は、そのまま、きよろり、きよろり、と眼だけ動かして、可視範囲内を見

回した。

かしかしかし、かっかっかっか。

やはり音は小部屋の外、フロアーと呼べばよいのか、あの地点に居たときとは比べものにならない程大きい。

改めて見てみると、部屋は、意外に広かった。

そこでは、よく家庭で使われているタイプの学習机のような、前と両横が板で囲われているタイプの机が、向かい合わさって五組、設置してあり、机の前にはもれなくローラー椅子が配置され、そこには、前から順に、九人の人間が座っていた。

彼ら、彼女らは、一心に机に向かって、しゃーしゃつ、かりかりかり、かっかっかっかっかっかっか何か書いているのである。

拓也の位置からはよく見えないが、体勢、腕の位置からして、机の表面は、図面を引くときに使う、トレース台のように、斜めにつくられているらしい。

と、一番前に座っていた女が立ち上がった。

「あ、どうも。サキタです。」

サキタは背がひよろりと高く、薄い体型をした、眼が切れ長の女性だった。

胸にでかく

「ドンマイ」

と書かれたTシャツを着ている。

ドンマイって…。

拓也は笑いをこらえて、サキタにお辞儀した。

「森中拓也です。よろしくお願いします。」

「うん。じゃあ、色々説明するから。って言っても、すぐ覚えちゃうと思うけど。」

サキタは軽く微笑むと、拓也を伴って、自らの机の前に立った。

ドンマイサキタの机は

非常に散らかっていた。

無数の紙屑がスペースに散らかり、幾つものペンが無造作に置いて

ある。

机上灯が白っぽくそれらを照らしていた。

机にしつらえてある本棚には、ファイルと、便箋がぎっしり詰められていた。

まるで受験生の机の様相である。

「あの…」

拓也が声を発すると同時くらいのタイミングで、サキタは説明を始めた。

倉庫番

ひと昔前に流行したコンピュータ・ゲーム。

プレイヤーは、設定された迷路のような通路を、荷物を押して進み、うまいことゴールまで荷物を持ってゆく、というもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1839a/>

転ばぬ先の、杖。

2010年10月23日13時37分発行